



巻頭言

「農学知的支援ネットワーク (JISNAS)」と 「農学国際協力」

山内 章

名古屋大学大学院生命農学研究科教授
名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院長
農学知的支援ネットワーク運営委員長

名古屋大学農学国際教育協力センター（現農学国際教育研究センター）、センター長を務める中で、「農学国際協力」という新しい学問分野を確立するという目標を掲げ、本誌を刊行してからすでに10年が経過する。その間に、編集に携わってこられた編集委員長や幹事のみなさまのご努力によって、国内外からの論文アクセス数も増えてきており、同誌の必要性、重要性をあらためて実感している。また、本年度よりJ-STAGEに搭載されることとなり、より多くの研究成果を世の中に発信できることを期待する。

本誌の編集と刊行を重要な活動の一つとしている農学知的支援ネットワーク（JISNAS：Japan Intellectual Support Network in Agricultural Sciences）の新しい取り組みとして、本年度より、FAO駐日連絡事務所と連携して、定期的にFAO-JISNASセミナーをオンラインで開催することとなった。2021年5月7日に開催された第1回キックオフセミナーでは、「国連食料システムサミット」（FSS：Food Systems Summit）について、日本の大学・学生、研究者及び研究機関の方々に情報発信し、100名を超える参加があった。コロナ禍で世界各地において国際会議やシンポジウム等の開催が延期となっているが、オンラインでのイベント開催は活発になっており、FAOとの合同セミナーもオンラインだからこそ継続的に実現できていると考えられる。大学・学生・研究機関・多様なステークホルダーを巻き込んだ対話によって、新しいネットワークが構築されることが期待される。

JISNASは、農学分野で教育、研究、社会貢献等に係わる国際活動への参加の意図を有する大学等の高等教育機関間の連携および我が国の国際農業研究機関との連携の促進を目指してきた。大学の研究力強化が求められる中、質の高い国際共同研究をどのように展開していくかが喫緊の課題となっている。中でも、学位を取得した帰国留学生とともに共同研究や人材育成プログラムをどのように実施し、推進していくかは非常に重要な点である。そのためには、様々な機関が実施しているプログラムを有機的に連携させて、海外からの留学生が将来的なパートナーとなるよう進めて行く必要がある。一方で、コロナ禍で海外での研究活動が制限され、また来日できない留学生も数多くおり、遠隔教育システムの構築も課題となっている。2021年12月20日に開催された第10回JICA-JISNASフォーラム（オンライン）では、「農学系留学生ネットワークを活用した新たな国際教育・研究協力の展開」をテーマに、留学生をパートナーとした新たな国際教育・研究協力等の可能性について議論がされた。JICAによるAgri-Net（食料安全保障のための農学ネットワーク）や大学における留学生ネットワークを活用した国際教育・研究協力の方策について、社会の動向に合わせて柔軟に対応していく必要がある。

本誌が、これらの活動や取り組みを強力に後押しし、関係者の研究発表と交流の場としてさらに発展することを願ってやまない。